# ヒルトン姉妹の逆襲

*Celebrity beat down- Hilton sisters by Lilguy*

## 翻案者による前口上

パーティやプレミアショーの度に、ド派手で露出度の高いコスチュームに身を包み、女性誌やゴシップ誌のグラビアを飾るリッチな姉妹……といえば、日本にもそんな姉妹がいますが、アメリカのヒルトン姉妹は、本当に金持ちであり、しかも本当に血が繋がっているという意味で、ひと味違うものがあります。

日本の女性誌にもたびたび登場し、ファッション企業の広告塔も務めていますから、ご存じの方も多いでしょう。

なにしろ家柄が凄い。かのヒルトン・ホテルの創始者であるホテル王コンラッド・ヒルトンの曾孫であり、大叔父はエリザベス・テーラーの夫だったこともあるニコラス・コンラッド・ヒルトン、父親はリアル・エステートの創始者であるリック・ヒルトン。そんな家に生まれ、実家の資産を背景にやりたい放題のヒルトン姉妹を、海外のタブロイド紙は「華麗なる女相続人」と呼びます。

姉のパリス・ヒルトンは１９８１年2月１７日生まれ。モデルも務めている彼女は、身長１７２でスリーサイズは９０・６０・９２。１９８３年１０月5日生まれの妹ニッキーのスリーサイズは公表されていませんが、身長は１６５センチと、ちょっと低め。

何本かの映画に出演したこともあり、最近話題なのは姉のパリスが２００３年１２月からフォックステレビで放映中の「ザ・シンプルライフ」に出演していること。ライオネル・リッチーのバカ娘ニコルとコンビを組み、トレイラーでアメリカを横断し、ゴージャスなパーティ・ライフとは対照的な生活を、アルタスやアーカンソーで送るという趣向の番組ですな（写真右下）。

そんなヒルトン姉妹の姉、パリスのプライベート・セックス・ビデオが昨年流出し、ネット上で公開され大騒ぎとなりました。ところが、そのビデオが堂々と市販されるに及び、本人自身が話題づくりのために流したのではないかという疑惑もあり（写真上）。

ともあれ、そんなゴージャスにして破廉恥な姉妹の物語、はじまりはじまり……。



私はヒルトン姉妹が大嫌いだ。ほんとうに大嫌いだったのだ。

単に、裕福な生まれで美貌にも恵まれ、したい放題の身の上に嫉妬しているのではない。いかにもスポイルされた振る舞いが我慢ならないのだ。彼女らの振る舞いは、高校時代、幾度も私を打ちのめした「思い上がった女の子」そのものだ。彼女らは、常にこう言わんばかりの態度で私に当たった。「あなたは私とやりたいんでしょ？　でも、あんたなんか、私の眼中にないのよ！」。

雑誌で、この姉妹の気取ったほほえみを見ない日はない。その微笑みを眼のあたりにする度に、私の心中に殺意が芽生える。甘やかされた馬鹿な小娘ども、私は彼女らをそう見なしてきた。実際に彼女らに会うまでは……。

そう、彼女らは確かに最悪な性格の持ち主ではあったが、少なくとも馬鹿ではなかった。彼女らは、確かに甘やかされた傲岸不遜な小娘だったが、少なくとも馬鹿ではなかった。言うなれば、悪魔の聡明さを備えていたのだ。

事の起こりは、ヒルトン姉妹が私の住む町に土地を買ったことにはじまる。

そこは本来、仕事に疲れた大人たちが、いっぱいの酒に癒しを求める場所だった。なのに、彼女らにしてみればはした金でその血を買収した姉妹は、そこを若造どもがじゃれあうショッピン

グモールを建てると発表したのだ。ために、幾つかのお気に入りのバーが閉店の憂き目にあった。
私や、飲み仲間たちは、断固、思い上がった生意気な姉妹に抵抗することにした。
ショッピングモールが完成し、オープニングセレモニーに着飾ったヒルトン姉妹が登場し、カメラの列の前でスピーチを行った。
「よう、雌犬（bitch）姉妹！」
「けばいぞ、パリス！」
「お姉ちゃんのフェラチオ、がんばって覚えな、ニッキー！」
ちょうど、テレビカメラは思わぬヤジに笑顔を引っ込めた姉妹の顔を映しだしていた。われわれのヤジは放送され、ちょっとしたニュースとなった。強大なゴリアテに立ち向かう小柄なダビデ。タブロイド紙はわれわれのささやかな抵抗を、そう書きたてられた。
私は、深く満足した。それを後悔する羽目になるとも知らずに……。

そう、ヒルトン姉妹が、私の家に現れたのだ。

彼女らはリムジンを我が家に乗り付けた。
車の音に私はドアをあけて庭に出た。リムジンから颯爽と降り立った姉妹は、ともにタイトなタンクトップにミニスカートで引き締まったウェストをさらしていた。足には８インチの透明な



パンプス。
我が家のささやかな庭に立つ姉妹は、確かに美しかった。まるで、ギリシャ神話に登場する女神が降り立ったようだった。
「あの……」
私はすっかり、度肝を抜かれ、動転し、やっとのことで弱々しく訊ねた。
「なにか……その、ご用でしょうか？」
「なかなか、かわいいお尻じゃない？」
ニッキーが私の背後に回り、お尻をなでた。
「あ、あの……」

仰天した私の前に姉のパリスがすり寄り、
「ちょっとお話ししたいことがあるの」
と言いながら、私の背中に腕を回し、太股から背中までゆっくりと撫でた。ニッキーは私の髪の毛に指を差し入れ、片方の

手で私のシャツのボタンをはずし、胸板を撫ではじめた。ゴージャスな美女たちからこんな扱いを受けるのは初めてだった。二人のすばらしい肉体から、なんともいえない芳香が立ちこめてきた。きっと高価な香水を使っているのだろう。

ニッキーは私の耳元に唇を寄せ、こうささやいた。

「どこか、3人だけで話せるところに行かない？」

「で、でも……いったいなんだって……」

「なんでもないことよ……まさか、私たちみたいな小娘二人を怖がってるわけ？」

「ちょっとドライブするだけよ」

パリスが百万ドルの微笑みを浮かべて口を添えた。

「ただ、3人でお話しなきゃならないことがあるの。あなたたちのすてきなエールが放送されちゃったから、私たちは計画の修正を余儀なくされたし、多大な損失も出たわ。いいえ、別に責めるわけじゃないのよ。ちょっとした取引をしたいだけ」

「あ、その……冷静な話し合いをしてくれるなら……」

私は卑屈な笑みを浮かべて言った。

「もちろんよ……。あなたは経済人じゃなくて、タフなファイター。あなたにふさわしい話し合いの場を持つつもりよ」

パリスは、私の腿の内側を撫でながら言った。



それが罠だということに気づくべきではあったが、彼女らの巧みな愛撫が、私の思考を鈍らせた。

私は彼女らとともにリムジンに乗り込んだ。心地よいソファに高価なワイン。

リムジンが静かに走り出した。

「どこに行くんです？」

私の問いに、

「いまにわかるわ。ちょっとしたプライベート・プレースよ」

と答えつつ、パリスは私の股間にかかとを乗せた。巧みな愛撫に、私のペニスは堅く勃起し、いまにも射精しそうだった。

ニッキーは、私の隣に座り、姉とカジュアルな会話を楽しみながら、手で私の股間を愛撫した。私のほうから眼をそらし、ひたすら姉に向かって話しているにもかかわらず、絶妙のテクニックだった。

下心は……あった。私は、彼女らが嫌いだった。その一方で、彼女らのピンナップを身ながらオナニーに耽っていたのだから。

リムジンが停まったのは、私なんかが足を踏み入れたこともない高級住宅地のまんなかにそびえたつ豪奢なマンションの前だった。

広大で、高価な家具や装飾品で飾り立てられた部屋に入るやいなや、パリスとニッキーはカウチに座った。
「ねえ、泳ぎにいかない？」
パリスが言った。婉然と微笑む彼女らに、私はどぎまぎしながら言った。
「でも……例の件について話し合うんじゃ……」
「まあ、いいじゃない。実はバーテンダーを招いてるの。ほら、あなたのお友達。私たちのために快く立ち退いていただいたちっちゃなバーで働いていた彼。彼をまねいて、４人で楽しもうってわけ？」
「で、でも……３人で話し合うと……」
「あら、あなた１人で、私たちを相手できるわけ？」
カウチの背にもたれ、きれいな脚を組んでポーズをとる姉妹に、私はそれ以上疑念を差し挟む気が失せた。
それよりも、タンクトップの下に息づく２人の乳房や、見事なボディを、マンションのなかにあるプールで満喫できる……、その誘惑に私は負けた。
「彼が来るまでの時間つぶしよ。さ、いきましょ。大丈夫、あなたのスイミングトランクスもちゃんと用意してるから」
パリスは立ち上がり、私の腕をとった。



「そうですか……わかりました」
卑屈に笑う私に、パリスは
「いい子ね」
と、軽く私を抱いた。
彼女らは私を別室に案内し、スイミングトランクスを手渡すと、男性のペニスを熱くさせる見事なお尻を振りながら歩み去った。
ところが、着替えを終えた私がもとの部屋に戻ると、パリスもニッキーもさきほどと同じかっこうのままなのだ。
「あの、泳ぎにいくんじゃ……」
軽い失望とともに、おそるおそる訊ねる私に、パリスはこともなげに言った。
「計画変更よ」
彼女は、私に歩み寄ると、いきなりキスをした。両手で私の頭部を押さえ、舌を入れてきた。
なめらかに私の口内を嘗める巧みな舌の動きに、脳がしびれた。
次の瞬間、すさまじい激痛が下半身を襲った。
パリスは、私の睾丸に膝蹴りを浴びせたのだ。
衝撃と苦痛に床に膝をついた私の頭上から、パリスの哄笑が降ってきた。

「て、てめえ……」
私は、激痛渦巻く股間を両手で押さえつつ、顔をあげた。あまりの衝撃に、粗暴なホワイト・トラッシュの地金が出た。
「な、なんてことしやがる……」
「あら、痛かったの？」
ニッキーはそう言いつつ、私の顔に回し蹴りを放った。私は仰向けに倒れた。ニッキーは私の左右の足首をつかんで広げ、みぞおちや股間に、パンプスのヒールを突き立てた。
「まさか、私たちとセックスできるなんて思ってたんじゃないでしょうね」
苦痛に身をよじる私を、パリスは冷笑しながら、その見事な胸を誇示したり、股間をつかんだりした。
「このボディはね、あんたたちみたいな貧乏人には手に入らないものなの。あんたたちができるのは、せいぜいこのボディを抱いてるところを妄想してオナニーするだけ。手に入れたければ百万ドル用意するのね。あんたは、帝国の支配者たる私たちに逆らおうとした。それなりの罰を受けてもらうわよ」
私は必死に、睾丸を襲ってくるニッキーの足を掴もうとした。彼女は笑いながら言った。
「汚い手で触らないで！」
「調子にのるんじゃねえ！」



私は必死に威嚇した。
「てめえらこそ汚い手を使いやがって！　起きられさえすりゃあ、てめえら殺してやる！」
「起きられなくするまでよ！」
ニッキーは、すさまじい勢いで、私の睾丸にかかとをのめりこませた。私は絶叫し、身をそらせて痙攣した。
「彼のいうことも、一理あるわね」
パリスはくすくす笑いながら言った。
「急所への不意打ちは、たしかにフェアとは言えないわ」
「でもさ」
ニッキーは私の足首を離した。私はやっと解放され、両手で股間を押さえ、床を転がって悶絶した。
「正々堂々と戦ったところで、彼に勝ち目はあるの？」
「少なくとも、彼はそう思ってるんじゃない？」
「そうかなあ……」
「だって彼は知らないでしょ、私たちは、こいつのような貧乏人からたえず嫉妬のまなざしで見られてる。この手のトラブルはしょっちゅうよ。でも、私たちはボディガードなしで堂々と外を歩くわ」

パリスは私に目を向けた。
「なぜだか、わかる？」
「知るかよ……淫売めが……」
ニッキーが私の股間を蹴った。私はうめいて口をつぐんだ。
「ありがと、ニッキー」
パリスはほほえんだ。ニッキーは、私の顔をパリスに向けさせ、動かないように足で踏みつけた。
「教えてあげる……私は母からこう教わったわ。富をもたらすものは、権威と信頼、そしてセックスアピール、何よりも力だと。だから私は幼い頃からレスリングとマーシャルアーツを習ってきた。一度だって負けたことはないのよ」
私は、苦痛に歪む顔を動かし、鼻で笑ってみせた。
「あんたを負かすのはタブーだった連中としかやってないんだろ、どうせ」
パリスは冷笑で応え、
「立ちなさい」
と言った。その自信ありげな態度に、ちょっとためらった。
「聞こえなかったの！」
ニッキーは強く私の首を踏みつけた。私は悲鳴をあげ、急いで立ち上がった。



「さあ、勝負よ」
パリスは私と向かい合って立った。
「ばかばかしい」
私は首をさすりながら、言った。
「俺は、帰るぜ」
私はくるりと踵を返したが、フェイクだった。私はさらに振り向くなり、パリスに向かって横殴りに殴りかかった。
驚いたことに、彼女は軽く私の奇襲を受け止めた。私の腕をつかんで背後にねじりあげ、背中に肘打ちを浴びせた。腕がひきちぎられそうに痛んだ。
私は苦痛に泣き叫び、手足をばたばたさせたが無駄だった。
「やめてくれぇ！」
泣きわめく私に、パリスは勝ち誇って言った。
「ほんとに痛がりね。どう、私の勝ちでしょ？　実はさっき、あなたの前に、お仲間を一人招待したの。そう、例のバーテンダー。彼もあなたと同じ、男性優位主義者だったわ。女性が物理的な力で男性をうち負かすことはないって信念だけを支えに生きてるクズよ。彼がやっと私には勝てないことを認めたときには、肋骨が何本か折れて、鼻が曲がってたわ。ついでに、金玉もひとつ潰してさしあげたのよ」

「お、お願いです……」
苦痛と恐怖に、もうなりふりかまっていられなかった。金玉を潰す……たしかに、この傲岸不遜な姉妹ならやりかねない。
「や、やめてください！」
「ふふふ、こんな腕、へし折ろうと思えばいつだって折れるわ。どうせテレビに出てる私たちのことを馬鹿にしてたんでしょうけどね。あんたなんかクズよ、クズ以下なのよ！　あんたはただの貧乏人、私はリッチな女神様。おまけに、力比べでも勝てっこないの！」
パリスは私の右手をつかみ、指を裏側に曲げ始めた。
「ぎゃあああああ！」
「ああ、泣いてる！　男のくせに泣いてる！」
ニッキーが手をたたいて笑った。
パリスは、私を突き飛ばすように離した。私はカウチになだれ込むように倒れた。
苦痛と屈辱に苛まれつつ、しばしうめきながらうずくまっていた私がやっと立ち上がったとき、パリスは私の胸に蹴りを浴びせた。
私は吹っ飛ばされ、背中を壁にたたきつけられた。パリスは、くずおれそうになる私の喉を、長い脚を伸ばし、踵で押さえつけた。息が詰まった。
彼女の足に支えられつつ、私は恐怖でふるえた。彼女がちょっと踵に力を入れれば、私を殺す



ことだって可能なのだ。
おびえきった私の表情に、パリスは微笑み、踵をおろし、指で手招きした。私は、彼女に飛びかかった。彼女はひらりと私の突進をかわし、腕をつかんで投げ飛ばした。
私はテーブルに背中から落ち、苦痛にもだえた。パリスは、私の胸板を踏みつけた。
「もうわかったでしょう？　あんたは何をやっても私にはかなわないって」
彼女はそれから私の傍らに座り、長い両脚で私の胸を挟み、締め付けた。見たこともないほど美しく長い脚が、私の肋骨を砕き始めた。私は絶叫し、あがいたが、逃れることはできなかった。
「貧乏人の弱虫が勝てるなんて、映画のなかだけよ」
パリスは涼しい顔で笑いながら言った。
「顔が真っ赤だわ」
ニッキーが笑った。
「女の子に負けて、恥ずかしいのかな？」
「こういうクズは、私たちのことを、甘やかされた育った怠惰な金持ちの小娘とあざけってるのよ。名声でも富でも権威でも勝てないけど、いざとなれば暴力で押さえつけることができるという妄想だけを頼りにね。それが、腕力でも勝てないのを認めるのは、すっごい恥辱なのよね」
パリスは勝ち誇って言いながら、さらに強く締め付けた。
「ご……ごめんなさい……」

私はやっと声を絞り出した。
「なんでも言うことを聞きます……許してください……」
「本気で謝ってるようには聞こえないんだけど」
パリスは言った。
「ちゃんと謝らないと、許してあげない」
「ちゃんと女王陛下、とお呼び」
ニッキーがくすくす笑いながら付け加えた。
「ち……ちきしょう……」
私は最後の反撃を試みた。
「は、離せ……警察を呼ぶぞ」
「警察があなたの言い分なんか信じるかしら」
パリスは冷笑した。
「それにいざとなれば、有能な弁護士もつくしね。地獄の沙汰も金次第。裁判なんか、お金の力で勝ってやるわ。どんな手を使っても私たちには勝てないのよ」
ボキッ！
私の肋骨が一本、折れた。
私は絶叫した。



「さ、どうするの？」
パリスに促され、私は叫んだ。
「ごめんなさい、女王様！」
「少しは礼儀を覚えたようね」
パリスは私を解放し、立ち上がった。
「さあ、私はもうこれで満足よ、帰っていいわ」

それから小一時間。私は、痛む股間や腕、肋骨を押さえ嘔吐をこらえながら豪奢なカーペットにうつぶせに伏せていた。
その間、恐れというものを知らない姉妹は、ワイングラスを傾けながら、お喋りに興じたり、時折りかかってくるＶＩＰやセレブたちの電話に応えたりしていた。
やっと嘔吐がおさまり、苦痛にわななく全身を抱えながらふらふらと立ち上がった私は、「ありがとうございます……」と頭を下げてドアに向かった。
「ちょっと待ってよ」
ドアの前にニッキーが立ちはだかった。
「私は、まだよ」
「あ、そうだったわね」

パリスは笑った。
「じゃあ、妹を倒せば、帰っていいわ。彼女は若いし、私より小さいから、簡単でしょ」
私は、渾身の力を振り絞って、ニッキーに殴りかかった。だが、簡単にかわされ、折れた肋骨のあたりにパンチを打ち込まれた。身を折って両手で胸を防備すると、背後に回り、股間を蹴り上げた。私は股間を両手で押さえてのけぞった。
さらに首筋に手刀を打ち込まれ、ふらふらと四つん這いになった私の腕をねじあげ、背中を足で押さえつけた。全身の骨が砕けそうだった。
さらに彼女は、床にうつぶせた私の背中にまたがり、スイミングトランクスを脱がせ、陰嚢を引っ張り出した。
「弱虫さん、いくわよ！」
言うなり、ニッキーは「ひとぉつ！」と叫んで、私の睾丸にパンチを浴びせた。彼女の拳と床との間で睾丸がひしゃげた。
私は絶叫し、海老ぞりになった。ニッキーは容赦なく「ふたぁつ！　みっつ！　よっつ！　いつつ！」と睾丸を殴りつけた。
「最後の仕上げは妹に任せてるの」
カウチに座ってグラスを傾けながらパリスは言った。
「ひとつ忠告しておくけれど、今夜のことを誰かにばらしたら、もうひとつの金玉を潰すわよ。



私の手で」
六つめのパンチを浴びたとき、ぐしゃっと音が響き、私の右の睾丸が破裂した。
目の前が真っ暗になり、全身が雷に打たれたようにしびれ、私は気を失った。